

「感謝は、恵みから生まれる」

そのころイエスはエルサレムに上られる途中、サマリヤとガリラヤの境を通られた。ある村に入ると、十人のツアラトに冒された人がイエスに出会った。彼らは遠く離れた所に立って、声を張り上げて、「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください」と言った。イエスはこれを見て言われた。「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」彼らは行く途中できよめられた。そのうちの一人は、自分のいやされたことがわかると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリヤ人であった。そこでイエスは言われた。「十人きよめられたのではないか。九人はどこにいるのか。神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」それからその人に言われた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰が、あなたを直したのです。」

ルカ福音書 17章 11節～19節

叫びが変わる

今回は、感謝ということを考えてみたいと思います。まず、この10人が罹っていたツアラトという病についてですが、この病は、伝染性であり、不治であり、皮膚に疾患があり、そして律法によって汚れた病とされ、神の会衆から除外されるものでした。そして、祭司がこの病を診断する役目を負っていました。ですからイエスは、10人に祭司の所へ行くようにと言われたのです。

祭司からツアラトと診断されると、人里離れた洞穴のような所で生活するようになります。たまに町に出てくるときには、大声で「私は汚れています！」と叫びながら歩くという決まりがありました。さらに、それを聞いた人々は、風下何メートル、風上何メートル離れなければならないという決まりまであったそうです。ですから彼らは「遠く離れた所に立っていた」のです。

そして彼らは、大声で「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください！」と叫んだのです。この時、彼らの叫びが変わっているのです。「私は汚れている！」から、「イエスさま！」という叫びに変わっています。私たちも様々な叫びを心の内に抱え、あるいは声に出して叫ぶことがあります。しかし、ただ「私は***です！」と、どんなに叫んでも解決はありません。本当の解決は、私たちの叫びが「イエスさま！」という叫びに変わった時から始まります。さらにその叫びは、賛美の叫びに変わるのです。「大声で神をほめたたえる」と記されている通りです。

叫びが変わっていくのです。まず自分自身のことを叫び、それが「イエスさま」という叫びに変わり、さらに神への感謝と賛美の叫びに変わっていくのです。

10人の病人たちは、「イエスさま！」と叫ぶことで癒しを得ました。しかし、その叫びが

神への感謝と賛美にまで変えられたのは、10人の内の一人だけでした。

私たちは今回、癒しの恵みを得るだけでなく、神を大声でほめたたえる者にまでなりたいのです。この10人の内、癒しの恵みを受けた所で止まった9人と、感謝の叫びを捧げるまでに至った一人との違いは、どこにあるのでしょうか。

境を通られるイエス

イエスは「ガリラヤとサマリヤの境を通られた。」とあります。この両地方の間には、地域的な境だけではなく、民族的な差別という境がありました。ユダヤ人はサマリヤ人を神から見捨てられた呪われた民族とみなしていました。ですからその汚れがうつらないように、挨拶もしない、サマリヤの土地を通ることさえも忌み嫌い、わざわざその地方を避けて遠回りをするという状況がありました。

ガリラヤ地方に住むユダヤ人もまたユダ地方に住むユダヤ人からは、田舎者で、教養がなく、粗暴な人々というレッテルを貼られ、また異邦人が多く住んでいたことから「異邦人のガリラヤ」と呼ばれ、蔑視されている状況がありました。しかし一方で、ガリラヤに住む人々は肥沃な土地を外敵から守るために、非常に好戦的で反骨心のある気風があったそうです。

イエスは、その境を通られたのです。

イエスは、分裂と争いの状態にある両者の境に立つのです。どちらかの味方でも敵でもなく境なのです。それはイエスの恵みは、ガリラヤ人（ユダヤ人）にもサマリヤ人にも等しく注がれることを現わしています。

今も至る所に「境」があります。人の心の内にある境、人と人との境、教派と教派の境、差別と被差別の境、地域、民族、国家...の境。その境にイエスは立たれるのです。そして、そのどちらにとっても、イエスは癒し主であり、救い主なのです。

感謝は、恵みから生まれる

癒されたのは10人です。しかし、一人だけが祭司のところへは行かずに、途中でイエスのもとに感謝を捧げるために引き返してきたのです。しかも「大声で神をほめたたえながら」です。

なぜ、この一人だけなのでしょう。この一人と九人との違いについて、ルカは一言だけ告げています。「彼は、サマリヤ人であった。」のです。

この物語の前後を見ていくとき、ここで語られているメッセージは、ユダヤ人に対して、その選民としての特権意識にあぐらをかいた高慢さに警鐘をならすものです。

ですから、この九人はおそらくユダヤ人なのです。サマリヤ人を引き合いに出すことで、その高慢を打ち砕き、神の恵みに心を向けさせ、主への感謝の心を取り戻させようとしているのです。

さて、それでは、感謝を捧げた一人がサマリヤ人であることと、彼だけが感謝を捧げたということには、どのようなつながりがあるのでしょうか。

聖書を通して、私たちは「恵みと感謝」がいつもセットで描かれていることを知ります。代表的なのが詩篇 136 篇です。

「主に感謝せよ。主はまことに慈しみ深い。主の恵みはとこしえまで。」

感謝は、恵みから生まれます。恵みとは、無代価で、無条件で、一方的に与えられるものです。私たちは、恵みが分かるときに、自然とそれを与えてくれた主に感謝を捧げるものです。恵みに反する考え方とは、自分の力で出来る、だから報酬を頂いて当然というものです。これだけ頑張ったのだから、これだけ犠牲を払ったのだから、これだけ労苦したのだからただいて当然と思うときには感謝は湧いてきません。感謝がなくなるということは、恵みを見失っているということ、そしてそれは神を見失なっているということと同じです。ですから感謝がなくなってきている状態というのは、神との関係において危機にあるということです。

ロンドン・オリンピックの女子体操個人総合において金メダルを取ったガブリエル・ダグラス選手は、黒人女性として初めての体操競技の金メダリストとして注目されました。クリスチャンである彼女は、金メダルを取った時のインタビューで「神の恵みが天から降って来た」と言ったそうです。

彼女は、おそらく血のにじむような壮絶な練習、節制、努力をして来たに違いありません。しかし、彼女は、金メダルは恵みだと言うのです。どれだけ自分自身を称賛しても、誰もがそれを認めるでしょう。しかし彼女は「神に栄光を帰そう」と言うのです。

私たちは、血のにじむような労苦の成果を得たとしても、それは恵みであると心から思うことが出来るでしょうか。自らの最大限の労苦と神の恵みが、矛盾なく自らの内で統合され得るでしょうか。それとも対立するでしょうか。

例えば、大変な労苦を経て素晴らしい成果を上げたとして、それを見た人から「本当に神の恵みですね」と言われたとき、心からその通りだと思えるでしょうか。それとも「頑張ったのは、この私だ…」と言いたくなるでしょうか。

それでも、頑張ることが出来たのは？ そのための健康、能力、時間、環境、仲間、出会い...、私たちが頑張り、労苦することが出来たこと自体が恵みであるということに気づくなら、すべては感謝に変わります。確かに私たちは、恵みに取り囲まれているのです。

恵みが分からなくなる時は、神から心が離れている時です。それは、とても高慢な状態です。人間として最も危険な状態にあります。私たちは、どんなに成果をあげても、称賛を得ても、すべては神の恵みであることを忘れてはならないのです。

さて、このサマリア人にとって自らが癒されるということは、当たり前のことではないのです。それは、恵み以外の何ものでもないのです。神に選ばれた民でもない自分が、神から見捨てられたような自分が、それでも癒していただいたというのは、まさに恵みなのです。この恵みの体験が「大声で神をほめたたえる」という感謝と賛美の源なのです。

しかし、恵みは、9 人のユダヤ人にも等しく注がれたはずですが。彼らが感謝を捧げなかったのは、恵みがなかったからではなく、恵みに気づけなかったからです。目の前にある恵みに気づかない理由は、律法厳守という戒めの中に生きている者の限界です。彼らは、決して癒されて当然とまでは思っていなかったでしょう。しかし、恵み自体を知らないのです。

向きを変えて

サマリア人は、祭司のところへ行く途中で「引き返し」ました。祭司に向かって行く道から、イエスに向かって行く道へと“方向転換”をしたのです。

祭司とは律法の象徴です。律法は、病かどうかを判別します。汚れているか清いかを判別します。しかし、律法は病を判別はしても、癒しません。汚れを判別しても清めません。彼らを癒したのは、祭司=律法ではなく、イエスなのです。救いと癒しは、イエスにあるのです。

ここに、律法の時代から恵みの時代へという、歴史的な方向転換が象徴的に示されているのです。イエスの癒しは、いつでもそうです。ただ病を癒すだけではなく、そこから始まる新しい人生の道をも開いてくださるのです。

癒されたという奇跡でハッピーエンドなのではなく、そこからが始まりなのです。このサマリア人は、イエスに向かい、イエスと共に歩み、イエスに賛美と感謝を捧げる真の礼拝者として、恵みに生かされる人生を生きて行くのです。

今日もイエスは、境を通られます。サマリア側からイエスを見るのと、ガリラヤ側からイエスを見るのでは、その目に映るイエスのお姿は違って見えるでしょう。

あなたは、サマリア側からイエスを見ますか。それともガリラヤ側からイエスを見ますか？サマリアタイプの方は、差別と虐げの中で、自らの存在価値を見失い、自尊心が損なわれ、傷つき倒れている人たちです。

ガリラヤタイプの方は、常に「**ねばならない」「**べきだ」という生き方の中で、自分を裁き、また他者を裁く人たちです。

さっくりと分ければ、裁かれる側と裁く側、高慢な者と虐げられている者です。この両者は、タイプは違いますが、癒しを必要としているということは同じです。イエスは、両者を等しく癒されました。10人全員を癒したのです。まさに恵みです。

私たちは、サマリア側にしようと、ガリラヤ側にしようと、あなたの目に映るイエスに叫ぶとき、同じように恵みを体験するのです。

「神は言われます。『わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。』確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。」(2コリント6:2)

私たちは、恵みに生かされている者として、声語らかに、主に賛美と感謝を捧げましょう。